

ニホンヒキガエルの相対生長

松井正文(京大・教養・生物)

Relative growth in the Japanese common toad,
Bufo bufo japonicus, from Momoyama, Kyoto
MASAFUMI MATSUI

京都市桃山産のニホンヒキガエル *Bufo bufo japonicus* の4群:a-♂未成熟個体30, b-♀未成熟個体31, c-♂成熟個体46, d-♀成熟個体34, 計144個体を用いて体長に対する外部30計測値(頭長, 頭幅, 吻長, 吻・鼻孔間距, 鼻孔・眼間距, 眼瞼幅, 眼前角間距, 鼻孔間距, 上眼瞼間距, 耳腺幅, 耳腺長, 耳腺前端間距, 眼径, 鼓膜径, 眼・鼓膜間距, 両眼外縁間距, 手長, 前肢第三指長, 外掌隆起径, 内掌隆起径, 前肢第一指長, 前腕幅, 手腕長, 前肢長, 後肢第三趾長, 足長, 脛長, 後肢長, 内蹠隆起径, 外蹠隆起径)の相対生長様式を調査した。c, dでは体長範囲が狭いため相関係数は必ずしも高くなかったが, 相対生長係数 α について, 等生長, 優生長, 劣生長をそれぞれ I, T, B でabcdの順に示すと, BBIB型は全30形質中の9形質で, IIIB型が9形質で, また ITII型が5形質でみられた。各群間の α の差と位置の差(β)とを分散分析法により検定すると, α については成熟に伴う差として a, c間で3形質に, b, d間で9形質に有意差($p < 0.05$)がみられた。また性差については a, b間で2形質に, c, d間で5形質に有意差がみられた。 β については α よりも各群間で有意差がより多くみられ, a, c間で18; b, d間で7; a, b間で3; c, d間で19形質に差があった。この結果から α, β のどちらか, または両方に差のある形質数は a, b間で5; c, d間で20; a, c間で21; b, d間で13となり, 性差は未成熟個体では小さく, 逆に成体では著しく大きいことがわかる。すなわち, 成体でみられる相対生長様式の性差の多くはもの成熟に伴う様式の大幅な変化によって説明されるものである。

尖閣列島魚釣島の小型哺乳類について

白石 哲, 荒井秋晴, 内田照章(九大・農・動物)

Small mammals collected on Uotsuri-jima, the
Senkaku Islands
SATOSHI SHIRAISHI, SHUSEI ARAI, TERU AKI
UCHIDA

演者らは本年5月下旬から6月上旬にかけて, 沖縄開発庁が企画した学術調査に参加し, 魚釣島においてモグラ, セスジネズミおよびクマネズミを採集した。モグラ(1頭, 雌)の背面の体色は slate-black, 腹面は slate color, 頸部から胸部にかけては russet であった。体の大きさは屋久島を分布の南限とするコウベモグラよりも遙かに小型で, 体重は 42.7g, 頭胴長は 129.9 mm, 尾長は 12.0 mm, 尾率は9.2%, 前肢長(爪無)は 14.0 mm, 後足長は 16.0 mm であった。同列島と距離的に近い中国大陸の福建省産モグラ(フーチェンモグラ)よりはやや大型で, 計測値の上からは台湾産のタカサゴモグラによく一致した。しかし, タカサゴモグラの歯式は $\frac{3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3} = 40$, このモグラのそれは $\frac{3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3} = 38$ であり, その他の形質にも多くの差が認められたので, 別扱いをするのが妥当と考える。東支那海の絶海の孤島にこのようなモグラが生息している事実は, この列島の生い立ちとも絡み, 古地理学および動物地理学上極めて興味深く思われる。セスジネズミについては, 今回の採集で2頭(いずれも雄)を得たが, 頭骨各部の大きさからは台湾産のものに近いという印象を受けた。しかし, 鼓胞長, 脳函幅, 頬骨弓幅, 特に吻幅, 切歯孔長, 上臼歯列長, 第1上臼歯幅の4形質には第48回大会で報告したと同じく, 明らかな差が認められた。目下, 飼育中の同島産セスジネズミについて核型分析や交配実験を行ないつつあり, これらの資料を合わせさらに検討したい。クマネズミは24頭採集されたが, 福岡市および福岡県沖ノ島産の頭骨の各部における計測値と比較検討した結果, 有意差はいずれの部位にも認められなかった。